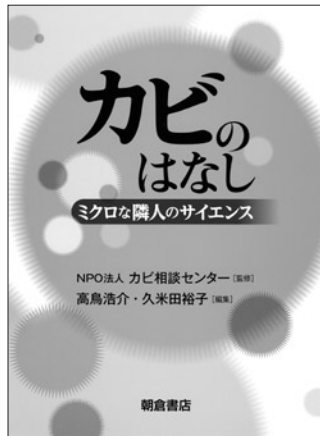


B O O K



『カビのはなし —ミクロな隣人のサイエンス—』

編集者
高鳥 浩介
久米田 裕子

2013年9月25日発行

カビというと、お餅に生えた青カビや風呂場の壁や床のタイルのメジの黒カビなどで頻繁にお目にかかっているものの、カビというものがどのようなものかと問われると、専門家以外はあまりよく知らないのが現実である。一般の人はカビというと、食品を劣化させたり、環境を悪化させる原因になったりと、あまり良くないイメージを持っている人が多いが、近年、アニメ“もやしもん”の流行で若い人には認知度が高まっている麹菌のように、醗酵や醸造の分野で活躍する有用なカビも多く、いずれにしても人の生活との関連は深い。本書は、長年に渡り、カビの研究を重ねてきた“カビ”の大家が、一般の人にもカビというものがどのようなものであるかを理解していただけるよう、わかりやすくまとめたカビの入門書である。

本書は全部で9章から構成されており、第1章“生活環境にみるカビ”と第2章“カビとはなにか”では、主にカビの微生物学についての説明がなされている。次いで、第3章、第4章、第5章では、私たちの生活をとりまく環境に存在するカビについて、“食”、“住”および“衣”に分け、それぞれに特徴的なカビとその問題点を紹介している。第6章“カビによる被害”と第7章“カビを防ぐ”では、カビによるアレルギーや感染症等の健康被害について紹介し、それを防ぐための方策について説明している。そして、第8章“有用なカビ”では、医学、農学、工学など様々な分野での有用なカビの応用例を紹介し、最終の第9章では、人間生活に有害でもあり有用でもあるカビとの共生を謳っている。

本書は、カビについての正しい知識を一般の人に理解してもらうために書かれた成書であり、確かにわかりやすく記述されているものの、全くの素人の方が読むには、やはり高校や大学の教養での微生物学程度の知識がないと、理解するのが難しいかもしれない。逆にいえば、“カビのはなし”という素人向けのタイトルとは裏腹に、ある程度の微生物や“カビ”に対する知識を持った専門家の方が読んでも十分に読みごたえのある内容を含んでおり、どちらかというところのような方が読むのが望ましいと思われる。本書は有害ならびに有用なカビの両方を取り扱っており、カビに関する適切な教科書が見当たらない中、教科書のように使うことも可能であり、また、本文中にちりばめられたコラムは目からうろこの知識も多く、楽しい読み物となっている。

なかなかカビについてわかりやすく簡単にまとめられた成書がない中、本書はカビの入門書としてはうってつけの書物であり、A5という持ち運びやすい大きさで、かつ2,800円という専門書としては手ごろな値段であることもうれしい。手元においておきたいお薦めの1冊である。

国立大学法人 東京農工大学大学院
准教授 林谷秀樹

発行所：株式会社 朝倉書店 電話 03-3260-0141
定 価：本体 2,800 円+税